

Title	梁啓超における桐城派
Sub Title	Liang Qi-chao's (梁啓超) attitude towards the Tong-cheng school (桐城派)
Author	佐藤, 一郎(Sato, Ichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1986
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.56, No.3 (1986. 11) ,p.15(277)- 29(291)
JaLC DOI	
Abstract	Liang Q_1-chao (1873-1929) was a prominent enlightener, scholar, journalist, writer and politician in the late Ch'ing and Early Republican China. He created a new style of literary writing, which exerted a great influence upon young intellectuals. He was also a person of primary significance during the transitional period between the Westernization movement Promoted by Zeng Guo-fan and L_1 Hong-zhang of the Tong-cheng School, and the reform movement promoted by Kang You-wei of the Gong-yang School in which Liang himself played an important role. Under such circumstances, Liang inevitably displayed a complex attitude towards the Tong-cheng School This, however, has seldom been studied by recent scholars. In this paper is presented an analysis of Liang's remarks concerning the Tong-cheng school, his collected works, Yin-bing-shi he-ji, form the primary material. Reference is also made to discussions at the Symposium on the Tong-cheng Prefecture. Anhui, in November 1985.
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19861100-0015">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19861100-0015</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 梁啓超における桐城派

佐藤一郎

## 一 序

清末民国初年の啓蒙思想家・学者・ジャーナリスト・文章家・政治家として梁啓超（一八七三—一九二九）の存在はきわめて大きい。日本の学会でもっとも知られている著作といえば『清代學術概論』（一九二二、商務印書館）であろう。今日まで数種の日訳が出版され、ほかに英訳も行なわれている。まず、その桐城派に対する評価を同書から引用しておこう。「方苞は桐城の人である。同郷の姚範、劉大櫟とともに文章を学び、曾鞏、歸有光にならって、いわゆる「古文の義法」を創立して〈桐城派〉を称した。……姚鼐（姚範の従子）はしばしば文をつくって漢学をこっぴどく批判し、方東樹は『漢学商兌』を著わして、ひろく閻若璩、胡渭、惠棟、戴

震らの学問を力のあらんかぎりには誹謗した。いらい両派はたがい憎悪しあつたのである。そのご陽湖の惲敬、陸繼輅が、〈桐城派〉から義法を学びながらも、いささかその文体をあらためた。張惠言、李兆洛は、いずれも考証学を研究するとともに、このんで文章をもつくり、惲敬、陸繼輅と同調して〈陽湖派〉を称した。……咸豐・同治年間、曾国藩は、なかなかの文章家であり、きわめて〈桐城〉を尊び、かつて「聖哲画像賛」をつくって姚鼐を格上げして周公や孔子と並列させた。曾国藩の功績がその時代に燦然たるものであつたため、〈桐城〉もまたそれによって重んぜられた。いまなお、これを利用して権貴に媚び流俗を欺こうとするものがあるありさまである。平心に論ずるならば、〈桐城〉派の開祖たちが、もちまへの狷介さでみずから高しとし、〈漢学〉全盛

の時代にあつて奮然としてこれに抵抗したのは、また勇氣あるものといふべきであり、末流の墮落をもつて創始者たちの罪に帰するわけにはいかぬ。しかし、この派は、文章をもつて論ずるならば、古めかしい焼きなおしにすぎず、とるべきところはない。学問をもつて論ずるならば、空疎を奨励し、創造を妨げて、社会に裨益するところがなかった。」(昭和49年1月、小野和子訳 平凡社)

もともと梁啓超は学問的には今文学の中心的存在の公羊学者康有為の弟子であり、宋学系統の桐城派に対して同情的であるはずがないが、周作人は梁啓超の文章を「唐宋八大家・桐城派及び李笠翁、金聖嘆をいっしょに融和して、その中から更に新味を作りだした」(『中国新文学之源流』)と見ており、桐城派古文との間に影響関係を認めているのである。これは『清代學術概論』二十五の「梁啓超の革新鼓吹」における記述と、明かに矛盾する。彼はいつている。「梁啓超は、以前から桐城派の古文を好まず、幼年時代、文章をつくるには、漢末・魏・晋のものを学んで、すこぶる技巧をたつとんだ。しかしこのときになってみずから解放されて、つとめて平易瀟達なる文章をかき、ときには俗語や韻語、さらには外国語をもまじえ、自由に筆をふるって、およそ束縛される

ことがなかった。学生たちは争つてそれをまね、新文体と称した。老輩たちはこれをいたくなげき、野狐(野狐禪すなわち邪道)と誹謗したが、しかしその文章は、論理明晰であり、筆鋒はつねに情感にあふれて、読者にとって、一種ふしぎな魅力をそなえていた。」

その文章は、文字どおり一世を風靡した。現代中国の第一級の知識人であり政治家である胡適・陳独秀・魯迅・郭沫若・毛沢東らは、いずれも梁啓超を愛読した一時期をもつたと告白している。たとえば毛沢東は、蕭三の『毛沢東伝』によれば、愛読しすぎて文章が梁啓超流になったといつて、師範学校の教師から注意されている程の心酔ぶりである。戊戌政変前後から日露戦争にかけてその影響力は頂点に達しているが、その評論における指導性が低下してのちも、かれの文章は愛読されたとすれば、その理由はなにか。その文章の特徴を分析して見ると、次の六点が指摘できる。

① 主張すべき内容と目的がはっきり定まっている。政治的にも立憲君主制。(一九〇二年ごろは革命排滿共和論) 哲学的には東洋思想を加味した進化論。その信念が文章に張りと言得力を与えている。

② 国内、諸外国の動向に通じ、時務に切。また中国

古典の知識が深い。

③ 文章にリズム感がある。古文の法を踏まえ、かつ新風をも盛りこんだ調子。

④ 修辭的にはシメトリカルで破調が少ない。対句的表現多用、個条的分類、対照的分類を好む。これは、古文の素養のある読者には理解しやすい。

⑤ 語彙の面では、日本で成立した新しい熟語・訳語を取り入れる。これが新鮮な感じを与える。

⑥ 梁啓超も自認している一種の情感があり、読者の琴線に触れる働きをする。

文学史家鄭振鐸（一八九七—一九五八）は、次のようにいっている。「彼は文芸上では、一隊の初登場の新鋭軍のような散文作家を振いたたせ、所謂自足して無氣力な桐城派文壇を粉碎したのである。……少なくとも彼はやはり中国近代のもっとも優れた、もっとも偉大な一個のジャーナリストである。……多くの学者・文芸家は、その影響力と勢力が狭くて、一部の人・ある種の社会、または一地方に限られがちであるが、梁任公先生の影響と努力は、悪しざまにいう人こそあれ、やはり普遍的であり、遠く届かざるなく、地として深く入らざるなく、人として受入れざる者なしといったところである。」

梁啓超における桐城派

（「梁任公先生」『中国文学研究』所収）

かれは同時に政治史の面から見ても桐城派の曾國藩・李鴻章の洋務運動の時代から公羊学派の康有為・梁啓超の維新運動へと展開する局面の中心人物であり、その桐城派に対する態度にはかなり複雑なものがあるのは当然であろう。しかしながらこの問題については、まだほとんど研究者による検討が進められていない。そこでここでは『飲冰室合集』（民国二十五年四月 中華書局）を基本資料として用い、梁啓超の桐城派に対する言及を分析しておきたいと思う。さらにまた、梁啓超の文章がどの点まで桐城派を継承しているのか、どの点で断絶しているのか少しでもこの問題の解明に貢献したいとのささやかな希望も抱きながら筆を進めることにしよう。

## 二 方苞・戴名世について

桐城派の始祖方苞・戴名世に対する評価とそれぞれの時代を代表する姚鼐さらに曾國藩・李鴻章・友人でもある敵復に対する評価の間には、もちろんかなりの差異が認められる。評価は方よりも戴に重く、劉大櫟よりも姚鼐に傾き、直前の時代の曾李についてはしばしば言及し、友人敵復への信頼はあつい。これは一般的にいつて経世

致用の性格をより多く持つ人物<sup>(1)</sup>への評価が、より高かったといふことができる。

方・戴両者については優れた歴史家であるとともに文字の獄の犠牲者である戴名世に同情を寄せるのは梁啓超の立場からすれば当然といえようが、桐城派の成立の事情からいえばそう簡単には断定できない問題を含んでいる。これは桐城派成立の時点において、方・戴両人のいずれに明朝風の主情的性格よりも清朝風の主智的な傾向がより多く認められるかという問題と関係があり、その点では方苞に後者の傾向が濃厚と考えられるからである。

詳細は専論<sup>(2)</sup>に譲り結論だけをいえば、両者の年齢差(名世は苞より十五歳年長)と性格・環境などにより決定されたものといえるが、前者の文体は発散型であり、後者はそれと比べて内省型であるからである。

それではここで梁啓超自身の方・戴評価を整理しておこう。

『清代學術概論』が発表されるよりはるかに早く、清末の光緒二十八年<sup>(一九〇二)</sup>に『論中国學術思想變遷之大勢』が発表されているが、これは先秦時代より説き起し「近世之學術」(起明亡以迄今日)第一節 永歷康熙間、

第二節 乾嘉間、第三節 最近世。に及ぶもので、『合集』の頁数では一〇四頁までである。その「永歷康熙間」と「乾嘉間」には、戴名世の名前はない。すなわち前者には「〔王〕崑繩孳孳以伝顔学為己任、与方望溪多所弁難、見於望溪集。」とあるだけである。一方後者には次のように出ている。ここにおける惠戴は、いうまでもなく惠棟と戴震のことである。「其時与惠戴学樹敵者曰桐城派。方東樹著漢学商兌、抨擊不遺余力。其文辞斐然、論鋒敏銳、所攻者間亦中癥結。雖然、漢学固可議、顧桐城一派、非能議漢学之人。其学亦非惠戴敵。故往而輒敗也。桐城派鉅子、曰方望溪苞姚姬伝。而自謂尸程朱之伝、其实所自得者至淺薄。姬伝与東原論学数牴牾。故經学家与文学家始交惡云。自宋歐陽廬陵有因文見道之説、厥後文士、往往自託於道学。平心論之、惠戴之学、与方姚之文、等無用也。而百年以往、国学史上之位置、方姚視惠戴何如哉。」

漢学派に対しても桐城派に対してもその評価は厳しいが、特に桐城派古文に対する評価にはひととき厳しいものがある。ここでは戴名世の名前は挙げられておらず、桐城派古文の作者というよりも後年には歴史家として万斯同と併称して高く評価するに至るのである。<sup>(3)</sup>この事実

については、あとでまた考察することにしよう。

### 三 幼小の頃の教育と桐城派

その幼少の頃の学習については、「三十自述」(光緒二十十八)がなによりの資料であるが、終始行動を共にした丁文江撰『梁任公先生年譜長編初稿』全三十八巻はもっとも信頼するに足る広義の伝記である。梁啓超の数えの十二歳は光緒十年甲申、すなわち西暦一八八四年に当る。「三十自述」にもあるように、この歳にはじめて姚鼐の『古文辞類纂』に出逢った。これは桐城派の立場から文章の体系的な把握を意図した書物であるが、その時の状況は次のようである。「十二歳廸試学院、補博士弟子員、日治帖括、雖心不慊之、然不知天地間於帖括外、更有所謂学也。輒埋頭鑽研、顧頗喜詞章、王父父母時授以唐人詩、嗜之過於八股。家貧無書可読、惟有史記一、綱鑑易知録、王父父日以課之。故至今史記之文、能成誦八九。父執有愛其慧者、贈以漢書一、姚氏古文辭類纂一。則大喜、讀之卒業焉。」

光緒十三年、その数えで十五歳の時に、漢学の大儒阮元設立の学海堂に入り本格的な学問の道に一步踏出したのである。「時肄業於省会之学海堂、堂為嘉慶間前総督

阮元所立、以訓詁詞章課粵人者也。至是乃決舍帖括以從事於此。不知天地間於訓詁詞章之外、更有所謂学也。」

十七歳にて挙人、十八歳の進士の試験には受らず、北京からの帰途はじめて上海において『瀛環志略』を買って読み、世界への眼を開かれたのだった。

光緒二十三年(一八九七)には二十五歳、すなわち戊戌の政変の前年に長沙に行き、時務学堂において維新派の立場から教育に当った。「三十自述」にはその間の事情を、次の如く説明する。「十月湖南陳中丞宝箴、江督学標、聘主湖南時務学堂講席、就之。時公度官湖南按察使、復生亦歸湘助郷治、湘中同志称極盛。未幾、德国割抛膠州灣事起、瓜分之憂、震動全国。而湖南始創南学会、將以為地方自治之基礎、余頗有所賛画。」

そもそもこの湖南の地は清末以来の激動期に多くの革命家と反革命側の人材を輩出しており、革命史に名高い土地柄である。太平天国興起の際の爆発的なエネルギーを以てしても、ついに長沙城は陥落しなかったのである。梁啓超自身『戊戌政変記』の「附録二 湖南広東情形」においてその点を評価し、「中国苟受分割、十八行省中可以為亡後之図者、莫如湖南広東両省矣。湖南之士可用、広東之商可用。湖南之長在強而悍、広東之長在富

而通。……湖南天下之中、而人才之淵藪也。」

この地はまた曾国藩以来桐城派の拠点となっており、梁啓超が少年時代に愛読した『古文辞類纂』の続集『続古文辞類纂』(一八八二)の編者王先謙の故郷でもある。先謙は啓超の任地長沙の人である。国子監祭酒を経て江蘇の学政を督した。広東巡撫になり学海堂を設立した阮元<sup>5)</sup>の『皇清經解』の続集『続皇清經解』二百十種、千四百三十巻の編者でもあるから、桐城派が考証学を取入れて総合学の傾向を深めた時代の傾向を代表する学者であった。梁啓超が時務学堂を主宰した際の王先謙等の行動を見れば、政治勢力としての桐城派に対する評価が低下するのは当然であろう。ただし、曾国藩と李鴻章への評価は終始一貫して高い。『梁任公先生年譜長編初稿』巻六の光緒二十三年の頃に、次の記述がある。

「現在我們把狄楚青先生葆賢所記的一段話鈔在下面：『任公於丁酉冬月將往湖南任時務学堂、時与同人等商進行之宗旨、一漸進法、二急進法、三以立憲為本位、四以徹底改革洞開民智以種族革命為本位。當時任公極力主張第二第四兩種宗旨。其時南海聞任公之將往湘也、亦來滬商教育之方針、南海沉吟數日、對於宗旨亦無異詞。所以同行之教員如韓樹園・葉湘南・欧矩甲皆一律本此宗旨、

其改定之課本遂不無急進之語。於時王先謙・葉德輝輩、乃以課本為叛逆之拋、謂時務学堂為革命造反之巢窟、力請於南皮、頼陳右銘中丞早已風聞、派人午夜告任公、囑速將課本改換。不然不待戊戌政變諸人已遭禍矣。然湘中諸学子經此啓發、風氣為之一變。』(見狄記任公先生事略)」

これでは交流どころではなく、政治的社会的に対立関係にあったと判断することができる。梁啓超の桐城派全般に対する印象が、悪い方向に傾むいたことであろう。また阮元系の学問の継承者としての評価にも、当然のことながら影響があった筈である。戊戌政変前後と袁世凱の帝制復活に反対した護国軍蹶起の時とが、梁啓超の生涯を通じての反体制運動の政治的頂点と考えられるが、その最初の頂点での対立者として現れたのは長沙の王先謙だったのである。

#### 四 曾国藩・胡林翼・李鴻章に対する評価

それでは梁啓超のいわゆる同治中興の功臣たちに対する評価は、どうであろうか。同治中興については一般的にいつて肯定的であるが、特に曾国藩に対する評価は梁

の全生涯を通じて高い。ここでは曾の学問と文章および事業をどう見ているか、主な具体例に就いて見ておこう。まず「西学書目表序例」(光緒二十二年)に次のようにある。「曾文正開府江南、創製造局、首以訳西書為第一義。数年之間、成書百種。」さらに一層重要なのは、翌年の「湖南時務学堂学約」のなかに、湖南人曾国藩を取上げて、「二曰養心、……曾文正在戎馬之間、讀書談学如平時、用能百折不回、卒定大難。大儒之学、固異於流俗哉。今世变益亟、乱機益劇、他日二三子所任之事、所歷之境、其艱鉅危苦、視文正時、又将過之。」

以上からはるかに後に書かれた『中国歴史研究法』補編(民国十五年)における評価ではどうか。

「曾国藩是事業家、但他的文章也很好、即使他没有事業、單有文章、也可以入文苑伝。我們很希望他的年譜、記載他的文章詩句、或詩文的篇目。現行的曾文正公年譜、我嫌他載官樣的文章太多、載信札和別的文章太少、好文章儘多著、如李恕谷墓誌銘昭忠祠記等、應該多錄、卻未注意。」

梁啓超の桐城派古文についての一般的な評価とはまったく独立して、かれの文章を高く評価しており、その点では梁の友人である嚴復に対する場合にかなり近いとい

うことができよう。その点「中国四十年來大事記」(一名李鴻章)(光緒二十七年)の結論に「李鴻章必為數千年中国歴史上一人物、無可疑也。」とありながら、その詩文を特に評価することのない事実と対照的である。

曾国藩の文論と詩論および編著に關してはさらに『王荆公』と「国学入門書要目及其読法」(光緒三十四年)に見える。すなわちその氣を重視する文論に賛成して『王荆公』では「曾文正云、為文全在氣盛、欲氣盛全在段落清、每段分束之際、似断不断、似咽非咽、似吞非吞、似吐非吐。古人無限妙境、難於領取。每段張起之際、似承非承、似提非提、似突非突、似紆非紆。古人無限妙用、亦難領取。此深於文者之言也。余謂欲領取之。惟熟誦半山文、其庶幾矣。」といっている。曾国藩と王安石の文章に共通点を見出し、また同書中で曾国藩の詩論を以て王安石の七律を説明するのである。「曾文正論近体詩、謂当以排偶之句、運單行之氣。荆公七律、最能導人以此法門。」

「国学入門書要目及其読法」においては、もっぱら文章上の古文を目的とする學習を認めないのであるが、その丙の「韻文書類」では若き日に愛読した『古文辞類纂』と曾国藩の『經史百家雜鈔』はしばしば認めている。

「至於古文、本不必別學、吾輩總須讀周秦諸子、左伝、国



策、四史、通鑑、及其關於記載之著作。苟能多読、自能属文、何必格外標舉一種、名曰古文耶。故專以文鳴之文集不復録。(其余學問有關係之文集、散見各門。)文選、及韓柳王集聊附見耳。無已、則姚鼐之古文辭類纂、李兆洛之駢正文鈔、曾國藩之經史百家雜鈔可用也。」

戊の「随意涉覽書類」では、若き時には自分の学統の龔自珍を愛読したが今は厭うといい、かえって次のごとく曾・胡を評価するのである。「曾文正公全集 曾國藩。

胡文忠公集 胡林翼。右二集信札最可読、読之見其治事条理及朋友風義、曾滌生文章尤美、桐城派之大成。」

桐城派の大成者としての評価は動かない。これは『中国近三百年學術史』における、次の思想史あるいは學術史的な考察とも関係があるはずである。「当洪楊乱事前、思想界引出三条新路。其一、宋学復興、乾嘉以来、漢学家門戸之見極深。〈宋学〉二字、幾為大雅所不道。而漢学家支離破碎、實漸已惹起人心厭倦。羅羅山沢南曾滌生國藩在道咸之交、独以宋学相砥礪、其後卒以書生犯大難成功名。他們共事的人、多属平時講學的門生或朋友。自此以後、学人輕蔑宋學的觀念一变。換個方面說、對於漢學的評價逐漸低落、〈反漢学〉的思想、常在醞釀中。」

## 五 友人嚴復をめぐって

清末民国初年の思想界と文壇に大きな影響を及ぼした桐城派に属する人物に、福建省侯官の嚴復(一八五四—一九二一)と同省閩県の林紓(一八五二—一九二四)とがある。嚴復は曾國藩の弟子の吳汝綸が推重した桐城派古文の名手であり、信・達・雅を翻訳の準則として主張している。その翻訳中でもっとも影響力が大きかったのは『天演論』(一八九八刊)であり、その序文は吳汝綸の筆である。林紓は梁啓超の交遊関係の範囲に入らないから、ここでは一応除外しておこう。戊戌政変前後の嚴復については、B・I・シュウォルツが『中国の近代化と知識人』嚴復と西洋(平野健一郎訳 東大出版会)において、次のように述べている。「一八九五年から一八九八年までの期間、嚴復はずっと天津水師学堂総教習という希望のない地位にあった。……この時、嚴復はエリート教育者の役割を務めはじめたのである。……嚴復はまた、多くの点で、康有為やそのグループに対してさえも局外者であった。梁啓超や譚嗣同のような、このグループの若いメンバーが嚴復の著書に深く揺り動かされたことはたしかである。梁の後年の発展に対する嚴復の

影響が、その師康有為の影響よりもはるかに深いものとなったこともきわめて明白である。」

しかし一八九七年に天津で『国聞報』を創刊し、維新派の改革をすべて支持したにもかかわらず、直接的な運動への参加は光緒帝に拝謁一回にとどまり、「上皇帝万言書」も八月のクーデターの発生によって事態の進行に遅れたのだった。

実践運動においては敵復はたしかに梁啓超に遅れを取ったが、中国の近代を決定した二つの進化論(7)の形成をめぐってはきわめて重大な役割を果たしている。すなわち外来の進化論の体系をハクスレー（英）の『進化と倫理』（訳題『天演論』）によって中国にはじめて紹介し、当時の中国の状況に危機感を抱いていた知識人や青年層に熱狂的に迎えられたのである。その訳文は厳格な古文で綴られており、詩文の伝統的な権威がまだ持続していた清末においては、この点でもかれの訳書の価値は高かった。

中国土着の進化論とでもいうべき公羊学の系列に立つ梁啓超は、『天演論』をただちに受入れ、かれ自身の著作のなかに同書中でもっともよく知られた二句が絶えず用いられるようになった。すなわち「天沢物競、適者生

存」がそれである。「論中国學術思想變遷之大勢」においても敵復の功績に触れ、「惟侯官嚴幾道復、訳赫胥黎天演論、斯密亞丹原富等書、大蘇潤思想界、十年來思想之丕変、敵氏大力焉。顧日本慶応至明治初元、僅數年間、而泰西新學、披靡全國。我國閱四五十年、而僅得獨一無二之敵氏。」と断言しているのである。少年時に敵復の『天演論』と梁啓超の『新民説』から影響を受けた胡洪驊の適之という字も、次兄に呼び名を考えてくれるように頼んで定めたものであり（自伝『四十自述』）、のち胡適をペン・ネームにした。『静庵文集』（王国維）所収の「近代の學術界を論ず」にも、「ただ七・八年前に、侯官の敵復氏が訳したハックスレーの『天演論』が出て、世人の耳目を一新した。……物競い天沢ぶの言葉は、通俗の文にも使用されたのである。」と見える。さらに魯迅は回想文集『朝花夕拾』の「瑣記」に南京の路鉢学堂に学んでいた時のこととして「わたしも中国に『天演論』という一冊の本があることを知った。日曜日には城南に飛んで行って、白い用紙の石印版の部厚い本を買って来たのだった。……おう！なるほど世界にはまたハックスレーなる人物が書齋に坐っていて、そんな風に考えていたのだったか。そのうえ、なんと新鮮な考えであったことか。

一気に読んでいくと、物競天択も出てくれば……」の青春の日の感激的な出会の記録がある。この敵復は梁啓超の初期の代表作『変法通議』(一八九六)の「論幼学」の章に「善夫、吾友敵又陵之言曰、八股之害、錮智慧、壞心術、滋游手……」として登場し、同じ年(明治二十九年(光緒二十三年))にはまた「与敵幼陵先生書」を書いているのであるから、かなり親しい間柄と見なすことができる。全体的には梁啓超の「古議院考」に対する敵復の疑問に答える形を採り、文中には「天下之知我而能教我者、舍父師之外、無如敵先生。」とあるばかりか、当時まだ出版されていなかった『天演論』(一八九七年、天津の『國聞報』に掲載)を引用し、結びには「又来書謂時務諸論、有与尊意不相比附者尚多、伏乞仍有以詳教。」の字句が見えるのである。発表前に『天演論』の内容を知っているとすれば、これも相当密接な交流があったことの証拠となるう。

その外、その論文中にしきりに『天演論』以下の敵訳を引き、「近世文明初祖二大家之学説」緒言(光緒二十八年(一九〇二年))では、友人侯官敵幾道常言、『馬丁路得・倍根・笛卡兒諸賢、実近世之聖人也。不過後人思想薄弱、以謂聖人為古代所專有之物、故不敢奉以此名耳。』吾深佩其言。」と断言する。梁啓超はかれを桐城派系統の古文家としてでは

なく、新時代の知識人としての視点から接しているのである。

## 六 再び歴史家戴名世について

すでに桐城派成立時における方・戴両者の関係についてはひと通り論じてきたが、現代の中国における戴名世に対する関心度を、一九八五年十一月初旬に安徽省社会科学院と桐城県の共催で挙行された「桐城派學術検討會」における発表論文から考えてみよう。同検討会にて発表論文五十九篇中、題目に方苞の名の明示されているもの五篇、戴名世の名の明示されているもの同じく五篇の同数である。同検討会に先ずる時期の傾向を知る資料としては安徽省哲学社会科学連合会編集の『社連通訊』(一九八五年第八期・総第一五一期)所収の袁有芬編「桐城派研究論文索引」が有益である。方苞の項に四十二編を見出すのに比して、戴名世については僅かに四編に過ぎない。この事実はここに来て急速に戴名世に対する関心が高まったことを意味しよう。

「万斯同和戴名世、両位都是大史学家。」<sup>(3)</sup>とは梁啓超の見解であるが、それは具体的には名世の『予遺録』の著述によって確認されたものと考えられる。すなわち「戴

南山子遺錄」(民國十二年)において、梁は次のように評価する。「予遺錄以桐城一県被賊始末為骨幹、而晚明流寇全部形勢、乃至明之所以亡者具見焉。而又未嘗離桐而有枝溢之辭、可謂極史家技術之能、無怪其毅然以明史自任而竊比遷固也。所志不遂而陷大謬、以子長蚤室校之、豈所謂九淵之下尚有天衢者耶。癸亥臘不尽十日。」

ただ桐城一県の状況を記して明末流寇の全部の形勢を語り得たとすれば、これは歴史家としての大才を備えていたものといわなければならない。一九八五年七月に上海古籍出版社から刊行された王運熙・顧易生主編の『中国文学批評史』下の評価を見ても「它〔桐城派〕創于方苞・劉大櫟繼之、而姚鼐集其成。」の基本的な認識には変化はなく、梁啓超の戴名世評価は厳復に対する場合とやや相似形であって、桐城派臭が薄いその別才への評価というべきかも知れない。

梁はもともとかなり柔軟性のある公羊学者である。『要籍解題及其読法』(民國十四年)においても公羊伝を採らずに左伝をその文章優美の故に挙げているのも、想起される。ちなみにここで論及されている古典は、論語・孟子・大学・中庸・孝経・史記・荀子・韓非子・左伝・国語・詩経・楚辞・礼記・大戴礼記・爾雅である。

梁啓超における桐城派

われわれはここで、かれ自身の文体とも関係が深いいくつかの問題について触れなければならない。

## 七 陽湖派古文その他

前述の王運熙・顧易生主編の『中国文学批評史』下にもあるように、桐城派の主張と実践が桐城派以外の諸家に与えた影響は甚だ大きい。「桐城派既是清代文壇影響最大の流派、当時其他諸家文論便大都与之有不同程度的連繫、不論是賛成它或反对它。在桐城派流传過程中、也不斷遭到来自各方面的批評。有的輕視它從事古文為末芸、實類八股。有的反对它專事散体為不文、而提倡駢儷。有的認為它專奉『史記』和唐宋八家、取徑狹隘、而欲兼取諸子百家。……陽湖派是桐城派的變種而別樹旗幟。……惲敬・張惠言的古文之學、出自桐城派、而企圖突破其樊籬、開闢更廣闊的境界。」これが現代中国における最新の文学史的業績の見解だとすれば、梁の『中国近三百年學術史』での見解と大きくずれるものではない。かれは同書の「清代學術變遷与政治的影響」下の章で次のように述べている。「最要注意的是新興之常州学派。常州派有兩個源頭、一是經學、二是文學、後來漸合為一。他們的經學是公羊家常說、——用特別的眼光去研究孔子的春

秋、由莊方耕存与・劉申受逢祿開派、他們的文学是陽湖派古文、——從桐城派軀手而加以解放、兩派合一来産出一种新精神。就是想、在乾嘉間考証学的基礎之上建設順康間へ経世致用之学。代表這種精神的人、是龔定庵自珍和魏默深源這兩個人的著述、給後來光緒初期思想界很大的影響。」

ここに挙げられている人びとは、梁啓超の思想形成にもっとも近い位置にあり、その文章への影響も詳細に検討することが必要であらう。

梁啓超は晩年に至って『作文教学法』(民国十一年)を著し、自分自身を文章家として認め、とくに文言のみを対象に文章作法を分析的に説いている。これは必ずしも初期の「新民体」の文体分析の直接の手掛になるものではないが、ここではもちろん「諸君聴這段話、切勿誤認我所講的与什麼文章軌範什麼桐城義法同類。那種講法、都是於規矩外求巧。他所講的規矩、多半不能認為正当規矩、我所要講的、只是極平實簡易、而經過一番分析、有塗徑可循的規矩。換句話說、就是怎樣的結構成一篇妥当文章的規矩。」と断言して、『文章軌範』とか「桐城義法」と類を同じくするものではないと前置をしている。文学革命成功後の段階においても「桐城義法」に触れられて

いるとすれば、これは逆に方苞の理論が民国になっても強く意識されていたことを証拠だてるものといえよう。

## 八 結 び

結論的にいえば、梁啓超には日本で新たに成立した訳語を取入れるなど新しい工夫もあるが、清代の散文の主要な流れと無関係なわけではない。「新民体」とはすなわち一種の文語体であって、それも構文の上からいえばきわめて伝統的な手法を踏襲している。ここでは煩瑣な故事成語のかわりに、よく選択された普通語と新語が使用されているが、対句的な文脈、四字句の多用、さらには発想法において古文との断絶を認めるわけにいかない。故事成語こそ少ないが、古典や史実を巧に借用しているところがある。より正確にいえばこれは新体古文の一種であり変種であって、ひろい意味の伝統的文章の直孫たる資格に事欠かない。『変法通議』の頃の記事には、それにもかかわらず後年の新しい文体への方はすでにきざしはじめており、人の感覚に訴える力を備えてきているのである。そしてさらに『新民説』の段階に至ってやや平易暢達の傾向を増し、煽動性を帯びた「新民体」の成立を見るのである。

以上のような梁啓超における事實に照らして考えても、われわれはここで桐城派の学統・文論とその及ぼした影響を、再検討すべき段階に達したものと考えるのである。もちろん新中国になって、桐城派研究がまったく無視されたわけではなく、方銘の「桐城派評価新論」（一九八五年十一月、桐城派學術検討會論文）では次のように整理している。「關於桐城派的研究和討論、建國之后、有過兩次高潮。一次是六十年代初、那次圍繞「桐城派在社會主義社會有無作用」這一論題而展開、發表的文章大致有否定和肯定兩種意見。一九六二年我們寫了篇「論桐城派」的文章、（見『桐城派研究論文集』、安徽人民出版社一九六三年出版）試圖對這一問題作一個弁証的論述。不久、『光明日報』發表一篇文章、全部否定了桐城派、連我們的持平之論也作了批評。這次討論就在不容駁論爭鳴的情況下結束了。

第二次是八十年代初、由『江淮論壇』發起討論、這次民主的氣氛好、討論也比較深入具體。好處是分階段分作家的論述多、不足的是從宏觀的角度作整體性的評價似乎不夠、但這次討論、以積極思維為前提、對桐城派的文學成就和歷史作用作了肯定的論述、科學性大大增強了。」その結果、一九八五年十一月一日より五日まで桐城派

學術検討會が桐城派において舉行され、十一月七日付の『人民日報』は「文學界召開學術討論會、公正評價桐城派的功過」の見出を付けて肯定的に報道している。「參加討論會的來自全國的專家學者一百多人。日本慶應大學教授佐藤一郎和香港中文大學講師楊鍾基應邀出席了討論會。會上、國內外專家學者發表了六十多篇學術論文。他們從社會發展史・文學史・美學・哲學・文學批評等角度、對桐城派這一文學流派進行了深入研究和給予新的評價。桐城派是自清代初期直到「五四」運動時期這二百多年間、活躍在我國文壇上的一個很有影響的文學流派。這個流派的代表作家戴名世、方苞、劉大櫟、姚鼐等人、都是安徽桐城人。他們主張寫文章要效法漢代司馬遷和唐宋時代的著名古文家、在內容上表現封建道統、程朱理學、在形式上要「雅潔」、「文從字順」。辛亥革命後、桐城派末代弟子還主張寫「古文」、反對白話文、在「五四」運動中被進步青年斥為「桐城謬種」、這一流派從而走向衰微。幾十年來、我國古代文學史的研究、很少提到這一流派的成就和影響、有關這一流派的學術問題也未能充分展開討論。

在這次討論會會上、大多數專家學者認為、對桐城派不應該全盤否定或簡單拋棄、要批判桐城派的消極面、同時也要挖掘其中有價值的東西、給以公正的評價、要開拓桐



一層詳説すれば、彼れ云う。文というものに、下の要素なからざるべからず。即ち、第一は翰藻という事にして、已に文といえ、唯其の言わんと欲する所を言うたのみにしては、文となす能はず。必ず此れに藻績文飾を加えたものでなくてはならぬ。第二は吟詠哀思、即ち唯事実を叙し、議論を述べるを目的とするもの、真の意味に於ける文にあらず。必ず感情を写したるものでなくてはならぬ。第三は声律、即ち文には排偶ありて、音律之れに伴なわざるべからず。此の三要素を具して、始めて文となす事を得。」

梁啓超の新民体の作風と合致するところがあり、その作風に影響したことも考えられる。

(6) 梁の「新大陸遊記節録」(光緒二十九年(一九〇三))に面白い記事がある。中国食品本美、而偶以合肥之名噪之、故拳国嗜此若狂。凡雜碎館之食單、莫不大書「李鴻章雜碎」「李鴻章麵」「李鴻章飯」等名、因西人崇拜英雄性、及好奇心、遂産

出此物。李鴻章功德之在奥民者、当惟此為最矣。

(7) 佐藤一郎『中国文学史』下(高文堂)の冒頭：「清末の思想の中心的課題は『進化論』である。もちろんこの進化論は『へ』をつけて用いなければならない。つまり伝統中国の最後の段階を迎えて、なんらかの打開のための思想的掘へよりどころへが必要となってきたのである。公羊学へくようがくへを中国土着の進化論として見、欧米からの進化論の輸入を外部よりする変革への働きかけと考えるとき、この思想に対するそれぞれの人の姿勢によって、それぞれの社会的政治的立場を測定することが可能となろう。」

(8) 佐藤一郎「方苞の散文とその形成をめぐって」(『芸文研究』第十二)参照…以上のように義法は実に方苞の理論の根幹を成していたのであるが、彼の周辺にいた弟子たち、及びその批判者には方苞が主張した以上に強く義法がひびいた節がある。